
ねむれないよるのはなし。

響月柚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねむれないよるのはなし。

【Nコード】

N3151U

【作者名】

響月柚子

【あらすじ】

どうしても眠れない、そんな夜に「私」が生み出した、物語の数々。

これはその記録。

はじめに。

何故かどうしても眠れない、そんな夜。

貴方は何をしますか？

眠れるまで読書？

リラックス出来るお香を炊く？

クラシック音楽を掛ける？

とりあえず横になって目を瞑ってみる？

それもいいかも知れません。ですが私の場合は、小説を書きます。思うがままにペンを走らせて、ただがむしゃらに、物語を紡ぐ。

：最も、中には到底、物語と言えないものもありますかね。

あくまでこれは、私が眠れるまでの暇潰し。

ただの暇潰しですから、オチも面白みもないものばかりでしょう。

なら何故書き記すかつて？

そうだな…言わばこれは私の日記みたいなものなのです。

空想を言葉で具現化した、妄想の世界。

そう、これは眠れない夜に生まれた、小さな小さな物語。

只今漂流中。

気付くと僕は、ただぼんやりと空を漂っていた。

ふわふわと何処か頼りなく、けれど不思議と心地いい。

でも僕は自分が何故こんなことになったのか、皆目検討もつかない。第一、こうなる以前のことを、全くもって覚えていなかった。

まるで今しがた生まれたばかりのようで、でもそれにしては色んなことを知っていた。

僕はきつと、記憶喪失というヤツなのだろう。

そう冷静に判断して、状況を整理してみることにする。

…とは言っても、今僕にわかることは、自分が空を漂っていることだけだ。

それ以上も、それ以下もない。

これじゃ結局、全然わからないじゃないか。

状況は全く変わっていない。

…そうだ、周りの景色をしてみるのはどうだろう？

何か手掛かりになるものがあるかも知れない。

僕は出来る限り、辺りを見回した。

するとどうだろう？

僕の遥か下方に、一件の家が見えた。

赤い屋根が特徴的な一戸建てだ。

家の周りには広い芝生が広がっていて、牛や羊が放牧されている。どうやら牧場のようだ。

もう少し詳しく見たくなくて、僕は其処へ近付いてゆく。

すると牧場の片隅に、犬を連れて歩く人の姿が見えた。

あの人なら、僕のことを何か知ってるんじゃないだろうか？

そう考えて、僕はその人に話し掛けようと、更に近付いていった。

「…おや？今日は随分と雲が近いなあ」

いつものように家畜の世話をしていた男は、びゅう、と強めに吹いた風に、被っていた帽子を押さえた。

ふと見上げた空。

真っ白な入道雲が、いつもより近く感じられた。

ケーキの初恋

真っ白なコック姿の彼は、いつも忙しそうに厨房と店内とを行き来していた。

すれ違った時ふわりと香るのは、いつも甘いお菓子の香り。

彼の手から生み出されたスイーツの数々はどれも美味しそうで、いつもどれにしようか迷ってしまう。

繊細に細部まで凝って創られたそれらは、最早芸術品。

食べるのが勿体なくて、箱から出したらしばらく眺めることにしている。

彼の大きな手のひらから生み出される、小さな宝石達。

それを毎日日替わりで買うのが、いつしか日課になってしまった。

毎日毎日、仕事終わりに少しの寄り道。

小さなその洋菓子店が、いつしかなくてはならない大切な場所になった。

彼と話するのは、いつも事務的な会話だけ。

でも、それだけで満足だった。

一年、二年と通い詰めて、やがて少しずつ世間話をするようになった。

始めは些細な日常話。

段々親しげに、プライベートな話まで。

そしていつだっただろう？

彼は会うと笑い掛けてくれるようになっていた。

それはまるでケーキのように、甘い微笑み。

それを見る度に、胸の奥がきゅん、と切なくなる。

ああ、この気持ちは一体、何なんだろう？

その答えを、彼はまだ知らない。

夢と現実。

あたしの夢は、綺麗なお嫁さんになることだった。
大好きな人と、カミサマの前で永遠の愛を誓う。

あたしは真っ白なウェディングドレスを着て、ブーケを持って、彼
と笑い合う。

それは、あたしの些細な夢。
多くは望まない。

億万長者になれなくてもいい。

ただ、大好きな人達と、平和に暮らしたかった。

…それだけだったのに。

「君は、死んだんだよ」

ある日突然、何の前触れもなく、それは言った。

死…？

だってあたし、普通に息してるよ？

今日だって授業受けたし、帰りに友達と遊びに行った。

いつも通り、だったはずなのに。

「君はもう、肉体を持たない。証拠にほら、向こう側が透けて見えるだろう？」

…うそ…そんなはず、は…

「…酷い事故だったよ。運転手の居眠り運転が原因で、歩道を歩い

ていた君に車が突っ込んだ。…即死だったよ」

うそ…うそ！

そんなの…信じられない。

「だから君は、成仏しなければならない。…大丈夫、君ならきっと、すぐに輪廻出来るよ」

だってあたしまだ…高校生だよ？

やりたいこといっぱいあるし、恋だってまだ…

「…さあ、おいで。迷える魂よ」

あたし…あたし、は、

暖かな光が、彼女を包み込み、飲み込んでゆく。

無垢な魂は、聖なるそれに導かれ、やがてゆつくりと消えていった。

「…ごめんね…」

やがて眩いばかりのそれは、跡形もなく消滅した。

その場に残された少年は、悲しそうにそう呟く。

真っ黒な黒装束と身体に合わない大きな鈍色の鎌が、やけに目立って見えた。

節電と事務員

…暑い。

うだるような暑さは何のやる気も起こさなくて、オレは力なく机に突っ伏した。

今年は特に節電が騒がれているからか、毎年冷房ガンガンだった室内は、異常な程熱気が込もっていた。

開放放たれた窓から入る風は生温く、逆に暑さを際立たせている。

「あちい…」

呟いたところで暑さは変わらないのだが、どうしても言わずにはいられない。

クールビズだサマータイムだのと騒ぐだけ騒ぐお偉さん方は、ホントにこんな非効率的な働き方してんのかね…？

何もせずとも流れ落ちてくる汗を何度も拭いながらパタパタと扇子で扇いでみるが、残念ながら効果はあまりない。

何度となく吐いたため息を再び漏らしながら、書類を整理してゆく。

案外オレみたいな会社で事務作業してるヤツよりも、外に出て営業してるヤツの方が涼しいのかも知れない。

そう思うと外回りのヤツを呪いたくなっただが、この日射しの中歩くのも酷だ、と考え直す。

…うん、こっちのが多分、まだマシ。

窓の外、直射日光を目一杯浴びながら歩く人々の姿を見て、オレはまだ恵まれた方だろう、と、自分を奮い立たせる。

…帰ったら速攻、風呂入ろう…

汗でベタつく身体に不快感を覚えながら、ゆっくりと仕事を片付けてゆく。

業務終了まであと数時間。とある会社の、とある事務員の心の葛藤。

発熱と真夏日

熱があるかも知れない。ただぼんやりと、そう思った。

何とかTVを点けると、お天気キャスターが今日の天気を伝えていた。

『今日は一日、カラリとした暑さになるでしょう。日射病には気を付けて、小まめに水分を摂ることをおすすめします』

暑いのはこの所為か、はたまた自分自身か。

回らない頭でぐるぐると考えるが、答えは出ない。

とりあえず水を飲もうと立ち上がるか、ふらりとベッドに逆戻りしてしまう。

どうやら本当に熱があるらしい。

それでもこの暑さでは敵わないから、ゆっくりと慎重に起き上がり水を飲む。

生温い水道水が堪らなく美味しく感じられたのはきつと、喉がカラカラだったからだろう。

本当は空腹に薬はよくないが何も食べる気がしないので、仕方なく薬だけ飲む。

人間というのは不思議で、すぐに効果が出る訳ないのに何だか症状が軽くなった気がした。

…起きたら治っていますように。

そう願いながら、再び布団に潜り込む。

ミンミンという蝉の音が、不思議と遠くに感じられた。

使い魔の憂鬱。

「さあ、お逝きなさいっ！」

魔法少女は、今日も彼らをゴミのように使う。
まるで、使い捨ての駒のように。

『キエエエエ ツ!!!』

聞くに耐えない断末魔を上げて、魔物は浄化されてゆく。
魔法少女はホッと息を吐き、今日も一仕事終えた、なあって満足げに微笑む。

…彼らの犠牲等、全く気にせずに。

それが彼らの仕事だ、と言ってしまえば、それまでだ。
何せ、使い魔は彼女らが召喚したものだから、どう使おうがそれは彼女らの勝手だ。

ましてや名前からして、使われてなんぼなのかもしれない。

けれど彼らにだって、少しくらいの選択権が与えられてもいいだろうっ？

自分の身を削ってまで魔法少女の言いなりになるのは、割りに合わないと思わないか？

彼らも実は、前々からそう思っていた。

その不満は少しずつ少しずつ、着実に増えてゆく。

今はまだ、ほんの少しのわだかまりに過ぎない。

けれどもいつかそれは、魔法少女を脅かす脅威に成長することになる。

「さあ、お逝きなさいっ！」

けれどもああ、そのことをまだ、彼女は知らない。

とある雑貨店の話。

その店は、狭い通路の先にあつた。

知る人ぞ知る、小さな小さな雑貨店。

其処で売られているのは、他では置かれていない珍しい物ばかり。昼間でも薄暗い店内は、人の気配がほとんど感じられない。

店主の茜は、いつも暇そうにカウンターで分厚い本を読んでいる。滅多に客が来ないのに、果たして儲かっているのか？

そんな素朴な疑問が湧いてしまう。

しかし今現在未だに店は開いているのだから、きっとある程度の利益は得ているに違いない。

或いは、全くの趣味で店を開けているのかも知れない。

「こんにちは」

僕は意を決して、茜さんに話し掛けた。

「……こんにちは」

すると茜さんは読んでいた本から少しだけ目を離して、ぺこりと軽く頭を下げてくれた。

これが、僕と茜さんのファースト・コンタクトだった。

それからというもの、僕は毎日のようにその雑貨店を覗きに來ていた。

「こんにちは、茜さん」

「…またお前か」

そうして決まって店の奥にいる茜さんと、少しの間世間話を繰り広げる。

茜さんは素っ気ないけど、僕の話をきちんと聞いてくれる。

そんな茜さんが、僕は大好きで。
そして、彼女も満更でもないようで。

「ねえ茜さん。僕、考えたんですけど」
だから僕は、少しだけ意地悪な台詞を言う。

「？何だ？」
彼女は不思議そうに顔を上げる。
それに合わせて、僕はにこりと微笑む。

そして。

「僕、今求職中なんです。何でもしますから、雇ってもらえませんか？」

彼女は驚いて、小さく息を吸う。
そして少しだけ考えてから、こう返すんだ。

頬を少し染めて、
「…好きにしろ」
…って。

「はい」

僕はそんな彼女に応えるように、もう一度笑う。
今はまだ、恋人未満な淡い関係。
でもこんな関係も、悪くないから。

「よろしく願います、茜さん」

一人から二人になった、小さな雑貨店。

今日も静かに、けれど温かな空間を醸し出している。

「いらつしゃいませ！」

ほら、今日扉を開ければ、其処には。

「らしく」

男の子は、男の子らしく。

女の子は、女の子らしく。

そう言う風に言われるのが、一番嫌いだった。

男の子らしさって、何？

女の子らしさって、何？

男の子は、料理や裁縫をしちゃいけないの？

女の子は、外で泥んこになって遊んだり、かけっこしたりしちゃいけないの？

…どうして、性別で区別しようとするの？

それは私がずっと前から持ち続けてきた疑問であり、永遠の難題。
解決することはきっと、ずっとない。

人間は生物学上、二種類に分けられる。

でも、誰がその二種類しか分けちゃダメ、って決めたの？

一人一人個性があるのに、どうして二種類に無理矢理分けようとするの？

…分からない。

どうして？

私は、私らしく。

それでいいと思うのに。

「坊ちゃま、何処におられます…?! またそんな格好をして…貴方は新王寺家の大切な跡取り息子なのです…!」

「……」

だから、嫌いなんだ。

男とか、女とか。

そんなくだらないもの、消えてなくなってしまう方がいいのに。

「…さあ、こちらへ。そのくだらない格好からも、着替えてもらいますぞ」

老執事はそう言って、まだ幼さの残る主に手を差し伸べる。
主の本当の望みなど、知りもせずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3151u/>

ねむれないよるのはなし。

2011年9月23日13時15分発行